



建築士などの資格取得を支援する  
建築界のさまざまな分野を牽引  
業界の明日を担う若手、業界を目

# これからの 建築

第89回

## 岸 隆司

株式会社総合資格  
代表取締役

きし・たかし

1950年鳥取県生まれ。'69年、鳥取西高校卒業。'73年、関西大学卒業。'80年、名古屋市に(株)中部資格協会を設立。'87年、東京に(株)総合資格協会(現(株)総合資格)を設立、代表取締役役に就任。全国90余拠点に教室をもつ総合資格学院の学院長として、優秀な建築技術者育成のため陣頭指揮をとっている

岸—まず明星大学の沿革や特徴を教えてくださいいただけますか。  
村上—明星大学は、明星学苑を母体として、1964(昭和39)年に開学しました。学苑の創立が'23(大正12)年ですから、再来年に創立100周年を迎えます。大学では、「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を教育目標にしていて、その特色はワンキャンパスに理工系・人文社会系・融合系の全9学部12学科が集結している総合大学であることです。この特徴を生かした「交わり、広がる」学びを大切にしています。

岸—2020年4月に従来の建築学科から、建築学部へ改組されましたね。  
村上—これまで建築学科は理工学部の中の1学科としてあったのですが、私自身、建築という分野は理工学部やデザイン学部などのなかの1学科としてではなく、文化と技術を融合した学問領域をカバーするために独立した学部であるべきだと思っておりました。それがようやくかなったのです。

岸—近畿大学、工学院大学を皮切りに、建築学部を創設する大学も増えてきました。  
村上—そうですね。共通する部分も多いのですが、各コースに専門性の高いカリキュラムを用意しています。ただし、これらのコースは入試の段階から分かれているのではなく、3年生の後期くらいまでは、自由に授業を選べるようにしています。4年生になって研究室に入るときにコースを選択することになります。それまでは興味を持ってそうな分野をいろいろ選択できるように、あえてフアジーな状態にしていく点は1つの特徴だと思います。

岸—受験の段階でコースを限定せず、学びながら将来を考え、選べるということですね。  
村上—そうですね。1〜3年次にかけて専門基幹科目である建築設計製図を連続して学びながら、そのほかの基礎科目、専門発展科目を履修することで、建築の実践力を養っていきます。カリキュラムに沿って必修科目の単位を取れば、自動的に1級建築士資格の受験ができるのです。必修科目だけで受験資格が得られるのは、大学のなかでもまだ珍しいのではないかと思います。



建築設計製図の授業風景。必修科目として段階的に連続して学ぶことで、建築の実践的な力を磨く。大学開学当初より掲げてきた「実践躬行の体験教育」がここにも根付いている

総合資格の岸隆司社長が、  
する企業のトップや建築家と対談し、  
指す学生へのメッセージを発信します

# これからの 人材

## 村上 晶子

明星大学建築学部長



むらかみ・あきこ

1960年東京都生まれ。'84年東京藝術大学美術学部建築科卒業。'86年同大学大学院修了。同年坂倉建築研究所入所。2001年村上晶子アトリエ設立。'05年明星大学理工学部建築学科(現総合理工学科)教授。'20年同大学建築学部長

### 9学部12学科が集まる 総合大学

岸—まず明星大学の沿革や特徴を教えてくださいいただけますか。  
村上—明星大学は、明星学苑を母体として、1964(昭和39)年に開学しました。学苑の創立が'23(大正12)年ですから、再来年に創立100周年を迎えます。大学では、「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を教育目標にしていて、その特色はワンキャンパスに理工系・人文社会系・融合系の全9学部12学科が集結している総合大学であることです。この特徴を生かした「交わり、広がる」学びを大切にしています。

岸—2020年4月に従来の建築学科から、建築学部へ改組されましたね。  
村上—これまで建築学科は理工学部の中の1学科としてあったのですが、私自身、建築という分野は理工学部やデザイン学部などのなかの1学科としてではなく、文化と技術を融合した学問領域をカバーするために独立した学部であるべきだと思っておりました。それがようやくかなったのです。

岸—近畿大学、工学院大学を皮切りに、建築学部を創設する大学も増えてきました。  
村上—そうですね。共通する部分も多いのですが、各コースに専門性の高いカリキュラムを用意しています。ただし、これらのコースは入試の段階から分かれているのではなく、3年生の後期くらいまでは、自由に授業を選べるようにしています。4年生になって研究室に入るときにコースを選択することになります。それまでは興味を持ってそうな分野をいろいろ選択できるように、あえてフアジーな状態にしていく点は1つの特徴だと思います。

岸—受験の段階でコースを限定せず、学びながら将来を考え、選べるということですね。  
村上—そうですね。1〜3年次にかけて専門基幹科目である建築設計製図を連続して学びながら、そのほかの基礎科目、専門発展科目を履修することで、建築の実践力を養っていきます。カリキュラムに沿って必修科目の単位を取れば、自動的に1級建築士資格の受験資格が得られるのは、大学のなかでもまだ珍しいのではないかと思います。

### 2020年からスタートした 建築学部としての特徴

岸—明星大学の建築教育の特徴、また学部になってからの特色などを教えてください。  
村上—最大の特徴は、先ほども申し上げた総合大学ということですね。多分野の学部が1カ所に集まっているので、建築の専門領域だけでなく、さまざまな授業を受けることができます。専門教育としては、従来からの体験型学習を引き続き行いつつ、学部創設にあたって、意匠を中心に建築全般について学ぶ「建築デザインモデル」、住まいのあり方を対象とする「住宅デザインモデル」、都市の環境や安全性、社会インフラ、地盤や水利などを学べる「建築エンジニアリングモデル」の3

また、学生の定員がほぼ倍増したことによって教員の数も大幅に増やせたので、さまざまな先生方を招聘することができました。その人選で特に重視したのは、実際に現場で活躍なさっていること。つまり、より実践的な内容、設計に直接結びつくことを教えていただければ、ということですね。たとえば

設計のための構造デザインや、設計のための環境設備計画といったことですね。さらに、施工分野では最新のVR「※1」やAR「※2」といった分野に精通した先生もいらっしやいます。

## ピアノリストを目指した幼少期から建築の世界へ

岸―村上さんご自身のことについて伺います。建築を目指したきっかけや時期などを教えてください。

村上―私は、音楽家を目指していた母の影響で、小さいころは音楽家になるための英才教育を受けていました。中学時代には東京藝術大学の付属高校のピアノ科受験を目指していて、そのレッスンのために学校の出席日数が足りなくなるような生活をしていました。ですが、元々鋸で木を切ったりプラモデルをつくったりするのが好きだったこともあって、中学生だったある日、突然ピアノ科受験に向けた生活が嫌になってしまったのです。それで普通高校に進学しました。高校生活のなかで今度は大受験に向かうわけですが、なぜか友人に「君は建築に向いている、芸大にも建築があるよ」と言われたんです。

岸―ずいぶん方向が違いますね(笑)。  
村上―そうなんです。本当に、何が

きっかけになるか分かりませんよね。今考えると、通っていた小中学校は鎌倉の近代美術館の隣にあって、あの美術館が大好きだったという空間体験などの影響もあったのかもしれない。

岸―それで芸大の建築に進まれたわけですね。学生生活はいかがでしたか。

村上―私の代は女性が私しかいなかったのですが、ほかの人たちがすごく濃くて。いま芸大で教えているヨコミゾマコトさんとか、日建設計の山梨知彦さんとか、アルテックに行かれた渡辺康さんとか。みんなすごいんですよ。一日中建築の話をしていて、建築論を侃侃諤諤<sup>かんかんげつげつ</sup>やっている。私はそれに気圧<sup>きあつ</sup>されてしまって、いたっておとなしい学生でした(笑)。

岸―学生時代の友人は一生の仲間になりますよね。

村上―本当にそうですね。今でも皆さんとつながりがありますし、仲間の活躍は刺激にも励みにもなる。だから学生たちにも、高校や大学の友人は一生の宝物だから大切にしないさい、とよく言っています。

岸―村上さんといえば教会建築が思い浮かぶのですが、最初にかかわったのは東京サレジオ学園だそうですね。  
村上―たまたま叔父がサレジオの園長

行して、わりと早くから明星大学にも

来られているんですね。

村上―独立して3年目くらいいるときに声をかけていただき、来ることになりました。もう16年以上になります。

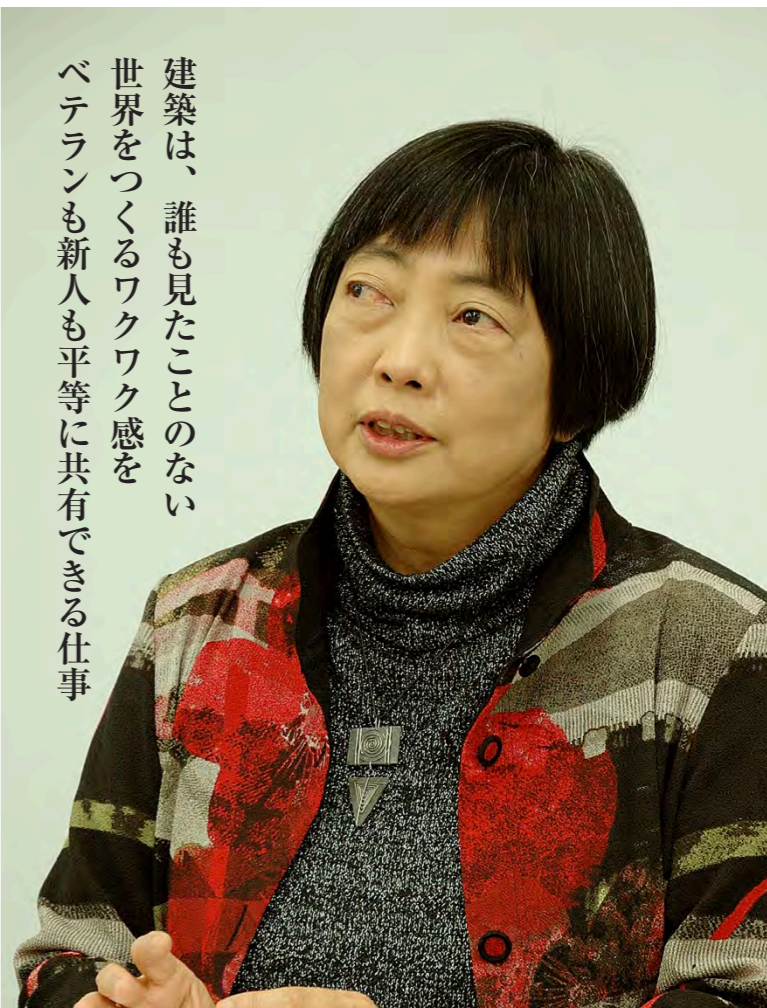
岸―学生さんとかかわっていて、最初

のころと今では何か違いますか。

村上―昔はもともとハチャメチャな学生が多かったかもしれないですね。今は、なんとなくですが、小さくまとまってしまう学生が多いような気がします。若いんだから、失敗を恐れずもつといういろいろチャレンジしてほしいですね。

岸―今は学生にどのようなことを伝えていくのですか。建築の魅力などと併せて教えていただけますか。

村上―建築の魅力は、プリミティブにそこに存在しなければいけない仕事であると同時に、いつも初めてであることだと思えます。建築は一品生産で、敷地や環境を含めてまったく同じ条件のものはありません。ペテランも新人も、同じスタートラインから始まるという意味で、すごく平等であるといえる。誰も見たことのない世界がこれから始まるというワクワク感をみんなが平等に共有できる仕事。こんなにも素晴らしい仕事はほかにあまりないんじゃないでしょうか。学生に伝えたいのは、たくさん本を読んで、旅などで多くの経験をjして、さまざまなことに挑戦して、人としての分厚さを身につけてほしいということです。それが必ず豊かな空間創造につながっていくと思います。そういう意味でも、またどうい



## 建築は、誰も見たことのない世界をつくるワクワク感をベテランも新人も平等に共有できる仕事

### 建築学部の授業で いない科目はない

だったので、まだ大学院生だったころに相談を受けたのが始まりでした。ですから最初はクライアント側で計画にかかわっていたんです。設計が坂倉建築研究所に決まると、当時所長だった阪田誠造さんが「最初にかかわったものは最後までやったほうがいい」と言ってくださって、大学院に通いながら、坂倉建築研究所でサレジオ学園の設計も担当させていただきました。

岸―そのまま坂倉建築研究所に入られたということですが、経歴を拝見すると、聖イグナチオ教会や鹿児島島のザビエル記念聖堂など、坂倉建築研究所でも代表的な作品を担当なさったのち独立され、その後もたくさん教会建築を設計されています。ただ、それと並

業でいららない科目はありません。ですから自分は構造に行くからこれはいらないとか、意匠に進むからこの授業は受けないとか、勝手に決めないでほしい。すべてがきつと自分のためになりますから。

### 4年生には資格取得の 積極的な支援をしていきたい

岸―20年から、学部生でも卒業後すぐに1級建築士試験が受験できるようになりました。そのため大手ゼネコンなどでは、新入社員に集中的に受験勉強をさせて、入社1年目で資格をとるようになり始めています。つまり社会に出たらすぐに資格を取ることが求められるわけです。先ほどのお話で、建築学部では必修科目を受講することで受験資格が得られるようになるというところですが、建築士試験や資格について、大学として何か対策などはお考えですか。

村上―具体的なことはまだこれからの部分もあるのですが、資格に対して興味をもたせる、取得の動機付けはやっけていきたいと思っています。いま考えているのは4年生になる前の春休みや夏休み中に集中講義的にキャリア教育をしていくことです。そのあたりは、ぜひ岸さんにも相談に乗っていただき



※1 Virtual Realityの略。コンピュータでつくられた仮想空間を、五感を通じて現実のように疑似体験できる技術。仮想現実  
※2 Augmented Realityの略。実在する景色、地形、感覚などに、コンピュータを使ってさらに情報を加える技術。拡張現実